

次の文は、実母に先立たれた姫君が継母に疎まれ、姉妹たちの世話をさせられるなど、つらい日々を送っていた頃の様子を述べたものである。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

八月一日頃なるべし。君ひとり臥し、寝も寝られぬままに、「母君、我を迎へたまへ」と、「わびし」と言ひつつ、

(1) 我につゆあはれをかけば立ち帰り共にを消えよ憂き離れなむ*

心なぐさめに言ひがひなし。つとめて、物語してのついでに、「これがかく申すは、いかがし侍らむ。かくてのみは、いかがは、し果てさせたまはむ」と言ふに、いらへもせず。わづらひてゐたるほどに、「三の君の御手水参れ」とて召さるれば、立ちぬ。心のうちには、とありともかかりとも、よきことはありなむや、女親のおはせぬに、幸ひなき身と知りて、いかで死なむと思ふ心深し。尼になりても、殿の内離るまじければ、ただ消え失せなむわざもがなと思ほす。

(『落窪物語』より)

注(*)

を||強意の間投助詞。

これがかく申すは||姫君に仕える侍女あこきの言葉。「これ」はあこきの恋人である帯刀のこと。「かく申す」は、帯刀の主人である少将が姫君と結婚したがっていることを、あこきに伝えたことを指す。

三の君||継母の実の娘で、姫君の姉妹にあたる。

御手水参れ||手を洗う水を差し上げなさい。

問一 文中の和歌は、姫君が亡くなった実母に呼びかけたものである。そのことを踏まえて、傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問三 傍線部(3)を現代語訳せよ。